



福島・東京間で「電力と食の循環」を目指す荒井ビーガーデン発電所。ソバが咲き誇る

福島から贈られた菜の花の苗で屋上緑化に取り組む銀座松屋。「菜の花交流会」は蜜源としても銀座を彩る春の風物詩としても欠かせない存在に



ボランティアスタッフたちとプロジェクトの発祥となった紙パルプ会館の屋上にて

NPO法人
銀座ミツバチプロジェクト

ただいま
活動中

ビルの上で養蜂に挑戦!
都会のど真ん中で
感じる命のつながり

し、パネルの下の畑でソバを栽培するソーラーシェアリングだ。19年9月には、福祉施設の屋根に太陽光パネルを設置する「会津美里町グリーンケアハウス発電所」も開所。銀座ミツバチが福島で生産したお酒やリンゴ等の農産物で屋根の賃料を払い、農地や屋根で作った電気は首都圏に売電する。都市と地域を結び、循環型社会を構築するこの活動は、セブーン・イレブン記念財団の助成を受けておこなわれている。

「菜種油の生産や緑化を考えて福島で農業を始めましたが、震災が発生し、仲間と連携して支援物資や義援金を福島に送る中で、都市も地域も支え合う、持続可能な循環型社会が必要だと考えました。緑化だけじゃない、いろんな課題に包括して向き合う活動へとシフトしていきました」(田中さん)

20年初頭、世界はコロナ禍に見舞われた。訪日外国人が激減し、営業時間の短縮や休業要請が繰り返されて、銀座の街は大きな打撃を受けている。「それでも花々は咲き、ミツバチが蜜を集めてくるので、スタッフだけで養蜂とビーガーデンを続けました。21年秋に、屋上のテラスにモニターを据え、オンラインで福島の方々とつなが

る。銀座の紙パルプ会館で貸し会議室の運営を担当していた私は、「銀座・食楽塾」という勉強会で岩手の養蜂家、藤原誠太さんと出会い、ミツバチを飼う屋上を探していると聞きました。屋上を貸せばいいのかと思っていたら、私たちが飼うことになり、街中で養蜂なんて危ないのではと疑心暗鬼でした。しかし巣箱を設置すると、週ごとに味や香りが劇的に変わる蜂蜜がたくさん採れる。銀座周辺には皇居や浜離宮があり、街路樹が折々に花を咲かせます。食べる物を育てていないので農業も使われていない、意外にもミツバチの住みやすい環境だったんですね。無機質な街がミツバチを通してカラフルなものに変わり、命のつながりが見えて驚きました。銀座の皆さんに採蜜

近年

「都市養蜂」が世界中で広がっている。NPO法人銀座ミツバチプロジェクト(東京都中央区)は、全国に先駆けて2006年春から都市養蜂を開始。都市養蜂と蜂蜜製品の生産、街の緑化、地方との連携、環境教育などに取り組んでいる。

副理事長の田中淳夫さんは、活動のきっかけをこう振り返る。

「銀座の紙パルプ会館で貸し会議室の運営を担当していた私は、『銀座・食楽塾』という勉強会で岩手の養蜂家、藤原誠太さんと出会い、ミツバチを飼う屋上を探していると聞きました。屋上を貸せばいいのかと思っていたら、私たちが飼うことになり、街中で養蜂なんて危ないのではと疑心暗鬼でした。しかし巣箱を設置すると、週ごとに味や香りが劇的に変わる蜂蜜がたくさん採れる。銀座周辺には皇居や浜離宮があり、街路樹が折々に花を咲かせます。食べる物を育てていないので農業も使われていない、意外にもミツバチの住みやすい環境だったんですね。無機質な街がミツバチを通してカラフルなものに変わり、命のつながりが見えて驚きました。銀座の皆さんに採蜜

を一緒にやりませんかと呼びかけた。百貨店や飲食店が動いて蜂蜜の商品化が一気に実現しました」

現在は銀座だけでなく丸の内等の事務所や商業施設の屋上など5カ所の拠点をもち、蜂蜜の年間収量は2トンにもなる。

全国の野菜や特産物を育てる屋上農園「銀座ビーガーデン」は、ミツバチの蜜源と街の緑化を目的に07年から始めた。苗植え式や収穫祭、地方の生産者を招くファーム・エイド銀座などを企画するうちに、全国の生産農家との交流が生まれた。09年に始まった「福島市×銀座 菜の花交流会」は、福島市荒井地区から贈られる2000株の菜の花を屋上に植える催しだ。10年3月には農業生産法人「銀座ミツバチ」を設立し、福島市の耕作放棄地で農業も開始。翌11年に東日本大震災が発生してからは、桜の植樹式や田植え・稲刈りツアーなどを通して絆を深めた。

震災後の福島を目にしたながらエネルギー問題を考えるようになり、福島市初のソーラーシェアリング事業にも乗り出した。18年9月に開所した「荒井ビーガーデン発電所」は、荒井地区にある農地に太陽光発電パネルを設置

る芋煮会を開催し、人と会ってどんな時間を過ごすのがいっそう大切な時代になったんだなと実感しました。和と洋の文化が一緒に息づいて、庶民の力で多様な価値観が生まれる銀座は、新しいものを受け入れる力がある街です。銀座とミツバチという真反対の世界も、始めたらいろんな化学反応が起きました。養蜂、農業、再生エネルギーという私たちの活動には、命を大切にするという共通理念があり、小中学校の出席授業では命の環境教育を心がけています。人の生活は自然の生態系の中にあり、命はつながっている。そういう世界観がないと、環境に負荷をかけて、社会はいびつな方向に向かってしまします」(田中さん)

コロナ禍をきっかけに、田中さんは都市養蜂の仲間たちと20年秋、「全国ミツバチプロジェクト会議」を設立した。オンラインで毎月話し合い、連携を深めている。都市養蜂は、自然林の減少や農業に脅かされるミツバチと生態系を保全し、街の緑化や地域づくりを促す営みだ。銀座のど真ん中で始まった活動は、今大きく広がっている。



同時開催された福島芋煮会のように。銀座・福島とも食材はすべて福島産のものを使用



紙パルプ会館の屋上「ビーガーデン」で開催された芋煮会。オンラインで福島とつないだ



採取した蜂蜜はオンラインストアや百貨店等で販売する



紙パルプ会館の屋上でミツバチを飼い始めてからすでに15年以上が経つ。ミツバチの扱いも手慣れたもの

